

## 国際森林年記念事業

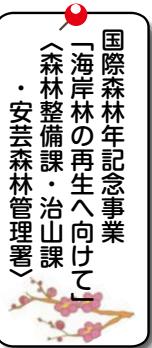
# 「海岸林の再生に向けて」

国際森林年記念事業の一環として、高知県室戸市羽根町千ヶ谷国有林の潮害防備保安林において、植樹イベントを開催しました。

【詳細は2頁】



2011年は国際森林年です



(社)高知林業土木協会員の方々約一二〇名で植樹しました。

二月一六日、高知県室戸市羽根町千ヶ谷国有林(潮害防備保安林)において、国際森林年記念事業の一環として植樹イベントを開催しました。

当保安林は、平成一六年の台風二三号による高波の被害を受けた箇所で、一日も早い森林の再生が必要となつてゐるところです。

当日は寒さも緩み晴天の中で、宮脇昭氏(横浜国立大学名誉教授)<sup>注</sup>が推進している複数種の木本郷土樹種を混植・密植して自然淘汰、共存共栄して管理を必要としない森林が形成されるという「宮脇方式」により、アラカシ、スダジイなど一三種類四〇〇〇本の苗木を、地元の羽根小学校四年生六年生児童五三名、室戸市職員、ダイドー・タケナカビバレッジ(株)、



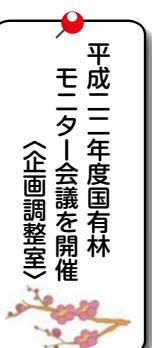
羽根小学校の児童による植樹活動



植樹活動指導を行っている宮脇氏(右)

植樹を終えて、羽根小学校児童の代表から「今日、植えた木が大きく育つて、私たちの生活を守つてほしい」などとの感想がありました。

注・木本郷土樹種とは、その地域に自生している樹木



二月一八日、四国森林管理局において、「平成二二年度国有林モニター会議」を開催しました。

国有林モニターの取組は、国有林野事業の運営等について理解をいただき、開かれた国有林の管理経営に活かしていくよう、四国在住の二六名の方に、幅広い意見や要望等をお聞きすることを依頼しているものです。

会議では、出席された一〇名の国有林モニターの皆様から、国有林モニターになつた感想や国有林に期待すること等について、意見を頂きました。

(主な意見等は次のとおり。)

○森林環境教育については、都市部の学校であまり行われていないのではないか。

また、国際森林年について、周囲で知っている人が少ないと、国際森林年や森林・木材の良さをPRしてほしい。

○環境も大事であるが、木材利用が順調でないと林業の再生はできない。

○イベント等の活動報告は広報でよく見かけるが、事前の案内等の情報が少ないのではないか。広く多くの人に発信して、多くの人が参加出来たら良いと思う。

○子どもが小さい頃は、よく森林公園に行つたが、国有林に対する認識は「国が所有している森林」程度のものであり、これほど重要で多様な活動をしているとは知らなかつた。

○人材育成は林業再生のためにも重要である。森林・林業再生プランに基づく国と地元の協力による森林における人材育成の取組は十分なものなのか。

良小学校において、森林・木工教室を実施しました。

この行事は、介良小学校の参観日の催し「ふれあい参加日・介良の祭り」で、木工製作の体験活動を通して森林への理解を深めさせたいと、学校側から依頼を受け、数年前から体験学習コーナーの一つとして参加しています。



モニターミーティング

域の方々の協力で、今年も二三の講座が設けられ、森林・木工教室には昨年と同じ一〇組の親子等が参加しました。

はじめに、森林教室では、森林の働きや木材利用についてビデオで学習しました。

木工教室では、間伐や森林整備で切り出された小枝や竹を使つたえんぴつ立てづくりを行いました。

参加者は、一年生から六年生まで幅広い構成のため、予め加工した材料を選んでもらい組み立て方式の木工製作としました。

最後は、子供たちに木で作ったゲーム、「けん玉」、「コロコロビンゴ」、「射的」などで遊んで木の良さを体験してもらいました。子供も大人も大はしゃぎの内に講座が終了し、局としても来年の講座に参加することを誓い終了しました。

また、今回、この講座に

今年度「森林ボランティア研修」を受講された2名の方もスタッフとして参加されました。

参加しての感想は「森林整備で汗流すのもいいけど、子供たちとのふれあいも楽しいものだ」と笑顔でした。



えんぴつ立て作りの様子



一月二八日は、木材の特徴や森林が地球温暖化防止に役立つており、木材が二酸化炭素を貯蔵していることを学習した後、ヤマザクラの枝を使ってクラフトを作成しました。生徒たちは、慣れないノコギリやクラフトナイフを使って枝を輪切りにしたり、削つたりして思い思いの作品を仕上げてきました。

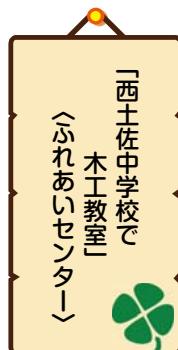
二月一五日にはシイタケの駒打ちを体験しました。当センター職員からきのこの種類や毒きのこの話、シイタケ栽培の仕方等を聞いた後、駒打ちに取りかかりました。

直径約一〇cmのクヌギに電動ドリルで穴を開け、シイタケ菌の駒を金槌で打ち込んでいきます。

木工品作りに当たつては、栽培をとおして、森林や木材、地域の自然や生活に関する心を持ち、理解を深めてくれることを期待しています。木工クラフトやシイタケ栽培をとおして、森林や木材、地域の自然や生活に関する心を持ち、理解を深めてくれることを期待しています。



ノコギリで切るのは結構大変



土佐中学校一年生二五名が、身近な自然の材料であるサクラの枝などを使つて木工品作りに取り組みました。まず、当センター職員が地球温暖化防止と「木材や森林」の関係について説明しました。

木工品作りに当たつては、作業中の刃物取扱と、木材の性質などについて説明を行つた後、作品作りに取りかかりました。野球部の生徒は、ホームランバットを作り初めましたが、サクラの枝は思いの外「硬い」ので削るのに苦労していました。また、女子生徒はアンパンマンやクマのストラップ等のかわいらしい作品を仕上げていました。

生徒達は、日頃、使い慣れていないノコやナイフに思いのほか苦労していましたが、仕上がった自らの作品に感動していました。

生徒たちには、このクラ

フト作りを通して、森林や木材への关心・興味に繋がる教室となりました。



野球のバット作成中

「竹炭作りに挑戦  
〈ふれあいセンター〉」

二月一七日、宿毛市立橋上（はしあみ）中学校の一年生五名が竹炭作りに挑戦しました。

中学校から当センターに地域の自然や産業についての環境学習の依頼があり、橋上地区は宿毛市中でも昭和初期までは製炭業が盛んであったことから、簡易炭窯で竹炭を造

ることにしました。

朝一〇時から鉄製の簡

易炭窯の周りをコンクリートブロックと土を使つて炭窯を造り、三〇分で完成した窯に長さ四〇cm程度に切りそろえた竹を約九kg入れ口火を焚きました。

煙突からは真っ白い煙がもうもうと出でています。

竹炭が出来るまでの間

は、空き缶を使った花炭作りにも挑戦しました。空き缶にマツボックリやドングリ、ニンジンやピーマンなどいろいろなものを詰めてたき火の中に入れて焼き、約三〇分で花炭の出来上がりです。

口火を焚き始めてから約三時間後、真っ白かつた煙突の煙は紫がかつた透明な煙に変わると炭の焼

きが取り出せるようになります。

その間に校庭の樹木の炭素現存量の測定を行いました。

木の直径や高さから木の重さを推計し、木の持つ炭素の量とこの木が吸収した二酸化炭素の量を計算しましたが、生徒たちには少々難しかつたようです。

口火焚きから五時間が経過し、いよいよ炭窯を開けます。

窯の温度が思うように上がらず、心配しましたが、約三kgの竹炭ができました。備長炭とまではいかないまでも、竹炭同士がぶつかるとキンキンと音を立て、予想外のできばえに生徒たちは驚いていました。

二月一七日、大月町立大月小学校の一年生四六名と二年生四一名を対象に、木工クラフト作りを開催しました。大月小学校は町内の九つの小学校が統合され、平成二一年四月に開校されました。校舎は、新築され腰壁はスギ板張り、

木工クラフト作りを通して、教室に使われている木の柱や壁板やクラフトの材料としての木など、木は色々な使われ方があることや木の良さに気づいてくれたようです。

生徒たちには、学校の周囲に広がる森林が地域の環境や産業に与える影響についての理解が深ま

つたようです。

について考える機会にな

ったようです。

一年生は午前中に、クマのストラップとモックンを作り、二年生は午後からクマとフクロウの置物を作りました。

当センター職員の指導を受け、顔・耳・鼻等のパーツを自分達で選び、ボンドを使ってバランス良く貼り付けて行きました。児童の中には、ボンドが乾ききらないうちに触つてしまいクマの耳が取れてしまったり、ボンドがはみ出してしまつたりと、悪戦苦闘しながらも時間内に一人二個の作品を作り上げました。



いよいよ火入れ

木工クラフト作り  
（木はいろいろ使えるんだ  
〈ふれあいセンター〉）

き上がりの知らせで、焚き口を赤土で塞ぎました。後は、炭窯の温度が下がり、

木工クラフト作りを通して、教室に使われている木の柱や壁板やクラフトの材料としての木など、木は色々な使われ方があることや木の良さに気づいてくれたようです。